

| | | | | |
|---------|--|---------|------|-------|
| 氏名(本籍地) | PHOO PWINT PHYU (ミャンマー) | | | |
| 学位の種類 | 博士(文学) | | | |
| 学位記番号 | 甲第90号 | | | |
| 学位授与年月日 | 2022年9月30日 | | | |
| 学位授与の要件 | 昭和女子大学学位規則第5条第1項該当 | | | |
| 論文題目 | タスク設定による聴解過程の異なりに関する実証的研究 ー日本語の聴解学習及び聴解指導の改善に向けてー | | | |
| 論文審査委員 | (主査) | 昭和女子大学 | 教授 | 近藤 彩 |
| | (副査) | 昭和女子大学 | 特任教授 | 金子 朝子 |
| | | 昭和女子大学 | 教授 | 井原 奉明 |
| | | 前昭和女子大学 | 特任教授 | 横山 紀子 |
| | | 東京大学 | 教授 | 宇佐美 洋 |

論文要旨

本論文では、日本語教育における聴解学習及び聴解指導に関する二つの課題を取り上げ、その改善を目的とし実証研究を行っている。第1の課題は、多肢選択式問題による大規模テスト（聴解テスト）が一般的であるため、聴解指導も多肢選択式問題の対策に偏る傾向があること、第2の課題は、聴解指導で扱うタスクの設定が現実世界の聴解行動（話し手に質問したり反応を示したりすること等）と乖離していることである。

これらの課題を改善するために、研究1では、大規模テストで使用される多肢選択式タスクと記述式タスクを設定し、両タスクにおける聴解過程の特徴を探った。ミャンマー人日本語学習者10名を対象に、同じ聴解テキストを用いて両タスクを行い、その聴解過程を回想法による発話プロトコルによって分析した。学習者の回答及び発話プロトコルをテキストと照合して分析した結果、次の3点が示された。(1) 多肢選択式タスクでは、選択肢に関連するテキスト部分が多く参照されたことから、選択肢によって学習者の認知資源を制限する機能を持つ。(2) 記述式タスクでは、解答及びテキスト外の情報を含む特徴が見られ、学習者が自身の既存知識と関連づけた独自のスピーチ表象を形成する理解構築過程が相対的に多く生じる。(3) 記述式タスクでは、1文以上の広い範囲をモニターしながら理解を構築する傾向が示され、複数の情報を照合しながら理解を構築するというメタ認知的な行動が生じやすい。

研究2では、第2の課題への対応として、話し手から直接テキストを聴き、分からないことについて質問をする「質問タスク」をもとに検証を行っている。ミャンマー人日本語

学習者 13 名を対象に、質問する機会を伴う「質問タスク」と、質問する機会を伴わない「一方向的聴解タスク」において、回想法によるプロトコル、要約文、質問タスクで使用した質問（「質問タスク」群のみ）をデータとしてそれぞれの聴解過程を比較した。分析の結果、次の 3 点が示唆されている。(1) 一方向的聴解タスクによる要約文では、テキスト文をそのまま用いる特徴が見られ、学習者が局所的な処理を中心に行ってテキストを聴いた様子が窺えた。(2) 質問タスクを実施した学習者では、全体の理解を把握してテキストを再構成した要約を書いた学習者が多かった。(3) 質問タスクを実施した学習者は、聴解途上で自分の理解を仮説検証するなど、理解過程をモニターしながら表象を構築した特徴が示された。

上記の結果から、聴解学習及び聴解指導の改善に向けて、多肢選択式とは異なる性質を持つタスクを積極的に取り入れること、質問タスクの聴解教室への積極的な導入が提案されている。

本論文の今後の課題としては、本研究結果の普遍性を検証すること、聴解過程をより精緻に探ること、質問タスクの教室への導入に際し、具体的な指導法を考案すること、より幅広い具体的なタスクを設計すること、縦断的研究により効果をさらに検証することなどが挙げられた。

論文審査結果の要旨

本研究のテーマである聴解は、目に見えない過程であるため、他の分野に比べ研究が少ないと言われている。そのような中で、本研究は次の二つの聴解指導における問題意識に基づいて論が進められている。第 1 は、大規模聴解テストのほとんどが多肢選択式問題であるため、聴解指導も多肢選択式問題の対策に偏る傾向があること、第 2 の課題は、聴解指導で扱うタスクの設定が現実世界の聴解行動と乖離していることである。この課題を改善するために、二つの研究を行っている。研究 1 では、多肢選択式タスクと記述式タスクにおける聴解過程の異なりに着目し、多肢選択式問題では選択肢を参照しながら理解構築を進めている傾向がある一方で、記述式問題の聴解タスクでは次の特徴が見られた。(1) テキスト外の情報である世界知識等の既存知識を活性化し、独自のスピーチ表象を形成していること、(2) テキストの 1 文以上の広い範囲を参照して理解構築をする傾向があること、(3) 広い範囲をモニターすることはメタ認知的な行動として、効果的な聴解の特徴とされるものであり、記述式問題ではメタ認知的な行動を促進する可能性がある。これは実生活の聴解に近い行動であり、このようなタスクを教室活動に積極的に取り入れることが提案されている。

研究2では、2種類のタスクを設定している。それは、「双方向的聴解タスク」（質問ありタスク）と「一方的聴解タスク」（質問無しタスク）である。本研究で設定された「質問ありタスク」とは、聞いたものに関して学習者自身が質問を作り実験者に問うことを指す。そもそも実生活では、互いに質問し合うことが普通であり、わからないことや疑問に思ったこと、聞いたあとに考えたことを口に出すことから、極めて現実場面に即したタスクが設定されている。（「質問無しタスク」は従来の教室指導で多く用いられているものである。）タスクによる違いが理解過程に影響を与えるか比較をしたところ、「質問あり」のほうが学習者はより正確な理解構築ができることがデータ（回想法によるプロトコル分析や要約文等）から妥当な分析のもとに示されている。また、本研究では、質問によるやりとりを通じて、理解の仮説を修正したりすることもさらに内容理解を深めたことも示唆されている。

研究1と2の研究課題及び研究方法は妥当であり、導かれた研究結果も一定の説得力がある。加えて、教育現場に示唆を与えるものとして有益であると判断できる。質問タスクを教室指導に導入するまでの指導上の留意点等を示す、長期的な実践によりその効果を検証する、タスクの種類を多様なものにするなど課題が見られるが、当該研究は聴解研究のみならず技能統合型の研究にも発展が可能であり、将来性が感じられるものである。同じテキストを用いて異なるタスクの聴解過程を比較した実証研究はこれまでなかったことから貴重な研究であり、研究全体を通じてその内容は高く評価できるものである。教育現場の教師に聴解指導について考えさせる契機を与える影響力のある論文でもある。よって、審査委員会は全員一致で、申請者に対し、博士（文学）の学位を授与するのが適当であるとの結論に達した。